

キャリア・パスポートを活用した キャリア教育の充実

千葉県立市原特別支援学校



研究のポイント

本校では、令和2年度からキャリア教育に向けた取組を進めてきた。キャリア・パスポート導入から5年が経過した現在、一定の教育的な効果がある一方で、課題も明確になっている。昨年度はつるまい風の丘分校で、地域協同・貢献活動の実践を通して、キャリア教育の充実について研究に取り組み、成果を得ることができた。それを受け本年度は、本校で「キャリア・パスポートを活用した、キャリア教育の充実」をテーマに掲げて、実践的な取組を行っていく。

■学校の概要 <https://cms2.chiba-c.ed.jp/ichihara-sh/honhome>

千葉県立市原特別支援学校は、昭和56年度に「千葉県立市原養護学校」として開校した。平成22年度には「つるまい風の丘分校」を開校及び、本校創立30周年を祝い、令和3年度には開校40周年記念行事を実施した。

令和7年度現在、開校から44年目を迎えている。「自立と社会参加を目指し、心身共に健康で、思いやりの心を持ち、自ら考え行動する児童生徒を育成する」を学校教育目標として掲げ、教育活動に取り組んでいる。児童生徒は、知的障害のある児童生徒が在学し、令和7年5月1日現在353名が在籍している。

■研究課題

1. 職員数が多く、経験年数や研修の程度も様々であり、職員一人一人のキャリア教育やキャリア・パスポートの知識や理解に差が見られる。
2. キャリア・パスポートの作成には取り組んでいるが、形式的に記入している状態で、授業内容を活かしたり、小学部・中学部・高等部・卒業後の系統性を意識したりした内容での作成が行えていない。
3. キャリア・パスポートを通して、保護者との情報共有や連携が不十分であり、キャリア・パスポートを普段の指導に活かさきれていない。

■研究の目的と方法

【目的】

1. 外部講師を活用し、職員のキャリア教育に関する学びを深め、キャリア・パスポートの活用方法について理解や知識の向上を図る。
2. 学部を超えた縦割りのチームディスカッションに取り組むことで、授業実践を活かして系統性を意識したキャリア・パスポートの作成を行う。
3. 全学部で統一した単元に取り組んでキャリア・パスポートを作成し、保護者に提示する機会を増やす。その振り返りを行いながら、日常の中で活用し、次年度に向けたキャリア・パスポートの見直しへ繋げる。

【方法】

1. 6月と11月に外部講師を招聘し、研修会を実施する。また、5月と11月の2回、職員アンケートを実施して比較分析し、研究成果を検証する。
2. 授業研究会を設定し、協議会や各部を縦割りにしたチームディスカッションを

行い、キャリア教育、キャリア・パスポートについて、授業実践や日常生活へ活かせるように知識を深めたり、意見を取りまとめたりする。

3. 本人や保護者とキャリア・パスポートの内容を共有するため、コメント欄を作成する。「いちようまつり（学校祭）」の単元を全学部統一単元とし、終了後、保護者にコメントを記入してもらい、内容を確認し、保護者との連携について振り返りを行う。

■研究概要

1. キャリア・パスポート活用の理解や知識の向上

成果：キャリア教育については、キャリア形成に向けて、自らの力で生き方を選択していくことができるよう、必要な能力や態度を身に付けられるように育むことの重要性を理解できた。キャリア・パスポートについては、学習や活動内容を記録して振り返ることで、児童生徒のみならず、教師や家庭にとっても今後の自立に向けた課題を共有することができることが理解できた。

職員アンケートにより、多くの職員が取組前よりキャリア教育、キャリア・パスポートの知識、理解、及び活用について意識が高まったことが分かった。

課題：キャリア教育の基礎を学ぶことができたが、実践に活かせるように育成を目指す四つの柱の理解や他校の実践事例から学ぶ必要がある。

2. グループディスカッションを通して分かったこと、考えたこと

成果：授業のめあてや意図がキャリア・パスポートに反映していけると良い。

キャリア・パスポートに評価欄を設けて、児童自身がシールなどを貼ることで、振り返りができ、頑張ったことが分かりやすくなる。

常に掲示しておくなど身近なものとしていつでも見返す状況づくりが大切。行事の振り返りとしても大切だが、毎日の積み重ねとしての記録も大切。

キャリア・パスポートの名称を児童生徒に分かりやすい名称に変える。

課題：各学部の教育課程や児童生徒の実態に合わせた様式を作成する必要がある。系統性を踏まえた各学部の様式を作成する。

重度重複児童生徒の授業での活用方法について、さらに検討する必要がある。

3. 全学部統一単元でのキャリア・パスポートへの取組と見直し

成果：活動の様子を写真や教師のコメントで保護者が共有することで、保護者も児童生徒の活動の頑張りが分かりコメントを書くことができた。また、そのコメントを児童生徒が確認することで自己肯定感や次の授業の意欲につながった。

課題：コメントが返ってこなかったり、コメントが一言であったりとキャリア・パスポートの目的や意図が伝わりきれいいなかったため、さらなる周知が必要である。

まとめ

今年度は、キャリア・パスポートの活用を全職員で見直し、キャリア教育の充実を図った。キャリア・パスポートが学びを循環させ、児童生徒の成長を支える重要なツールであることが明確になった。記録方法や様式の改善により、児童生徒の変容が捉えやすくなった。今後も学びの循環を意図的に生み出し、引き続き、学校全体で組織的にキャリア教育の充実を図っていきたい。

関連資料

- ・「キャリア・パスポート」に関すること 文部科学省 指導資料
- ・小学部から組織的に取り組む「キャリア発達支援」の実践 シアース教育新社